

「子どもの目さし行動」—母親の注意を喚起する「視線」— Eye-pointing of infant -infant's gazes which elicit mother's attention-

宮津 寿美香¹
Sumika Miyatsu

要 約

本研究は、母親の注意を喚起する視線を「目さし」と定義し、乳児期初期から前言語期を縦断的に観察することで、「目さし」の発達の意味を探ることを目的とした。1組の乳児(女児)とその母親の相互作用場面を対象とし、生後7か月～2歳3か月まで、家庭での観察による縦断的研究をした(観察合計36回)。記録から、乳児には言語に関連する4つの言動が抽出され(「目さし」(母親の注意を喚起する視線)、「指さし」、「一語文」、「二語文」)、それに対する母親の反応は大きく3つにわけられた(「見る」、「指さし」、「声かけ」)。その結果、「目さし」で特に多かったものは「声かけ」であり、その内容に対象の名詞が入っているものの割合を算出したところ、「指さし」と「目さし」はほぼ同一であり(目さし60.0%、指さし59.5%)、「目さし」と「指さし」は、同様の機能がある可能性が示唆された。また、乳児の視線が母親の声かけを引き起こすまでの平均時間を測定したところ、発達と共に、母親の乳児の視線への反応時間が長くなり、「目さし」が起こりにくくなることがわかった。乳児が、視線によるコミュニケーションから言語を用いたコミュニケーションへと移行することで、母親も乳児の状況に見合った関わり方をしていることが推測される。

キーワード: 目さし、指さし行動、前言語期、母子相互作用

1. 問題と目的

1-1. 前言語期のコミュニケーション

他者とのコミュニケーションの媒体として、ことばが出現する前にどのような行動が出現しているのか、前言語期におけるコミュニケーション行動の発達についての関心が高まり多くの研究がなされている。このことに関し近年注目を集めてきたのは、乳児をとりまく関係状況において「乳児—もの」関係における行動様式と、「乳児—人」関係における行動様式のそれぞれの発達過程があり、ある時期より「乳児—もの—人」の統合的な三者関係(発達心理学の分野では、三項関係と称せられることが多い)の形式がみられ、これが言語機能の基礎となるのではないかという論説である(瑞穂・武藤,1997)。乳児の他者認識は、生後9か月頃から単に自分に同調してくれる存在から、計画的に感情や情報を取り交わすことができる存在へと変わる。この三項関係を基盤としたコミュニケーションの成立は、社会的認知の始まりを意味しており、それ以前の時期と比べると画期的な変化の様相を示すことから「奇跡の9か月」(Tomasello,1995)ともいわれている。多くの場合この時期に指さし行動や、視線追従をはじめとした共同注意行動がみられ始める。特に指さし行動は、「指先の延長線上にある対象を周囲にある他の事象から抽出し、特定して指さす行為」(室岡,1985)

であり、視覚的に把握しやすいという利点がある。よって、まだ言語を自由に操ることができない乳児であっても、大人は彼らが行う指さし行動から興味の対象や要求を把握することができ、子どもが指さした対象に注目し、対象についての声かけなどを通して、コミュニケーションをとっている。このような指さし行動の出現は、子どもの内的状態を知る大きな手がかりとなり、言語取得や心の理論の獲得に重要であるという考えは今では広く受け入れられていることである(Bruner,1995;Eilan,Hoerl,McCormack,&Roessler,2005;Tomasello,1999など)。これらの背景から多くの前言語期のコミュニケーション行動の研究は、主に9か月以降を中心として取り上げられてきたが、乳児期初期ですでに指さし行動に付随する、もしくは関係する非言語的コミュニケーション行動を示しているとの指摘があり、特に子どもの「視線」に重点をおいたものが多い。ヒトの乳児は他者の視線や顔にきわめて敏感で、ほかの霊長類と比較しても際立っている(千秋・大森,2011)。瑞穂・武藤(1997)は、乳児が「乳児—もの」という二項関係の時期を過ぎ、「乳児—もの—人」という三項関係が設立する前の段階で、母親の手に注目する時期があるとの報告をしており、Wakaba(1981)、若葉(1981,1982)の観察によると、4か月児が対象を手に入れることが可能である

¹ 日本女子大学学術研究員 (Researcher of Japan Women's University)

にもかかわらずその対象を凝視することで、指さし行動と同等の機能を視線を用いておこなっていると指摘している。このような子どもがみせる凝視のことを、秦野(1983)は「目さし」とよんでいる。また、心の理論の獲得を検討する課題として、従来の誤信念課題ではなく、注視時間を指標とする実験パラグラムを用いることで、心の理論の獲得がより早期である可能性を示唆した実験結果も提出されている(Baillargon, Scott & He, 2010)。さらに、相互作用場面において母親の注意は、子どもの注意の方向と同じ方向に向けられていることが多いことがわかっている(Collis, 1997; Wakaba, 1981 など)。これらの指摘から、乳児期後期だけではなく、乳児期初期の母子のコミュニケーションの様式、特に視線に注目した研究は、その後のコミュニケーションや言語発達との関係、または指さし行動の発生との関連をみるうえでも重要であると考えられる。

1-2. 「目さし」の定義と研究の目的

子どもの視線が発達上でなんらかの意味をもつとの指摘はなされてきた(遠藤, 2005)が、乳児期初期から縦断的に観察されたものはほとんどなく、子どもの視線が発達と共にどのような変化をするのかなど具体的な研究はない。秦野(1983)のいう「目さし」とは、乳児が対象を凝視する現象を総称して言っており、指示機能の出発点としているが、指さし行動のように目に見えて把握しやすい行動とは異なり、子どもがなにをみているのか正確にとらえることは困難であろう。また、子どもたちに限らず人は覚醒している場合、常に何かを見ており、そのすべてに注目することは至難の業である。

本研究では子どもの視線の中でも、母親がなんらかの反応を示したものの、つまり「母親の注意を喚起する視線」を「目さし」と定義する。また、注意を喚起するという点では、指さし行動などの他の前言語期にみられる現象との関係のみみていく必要があると考える。それらの行動の出現により、目さしに質的、量的な変化がみられるのか、乳児期初期から前言語期を縦断的に観察することで、目さしの発達の意味を探ることを目的とする。

2. 方法

2-1. 対象児・者

20XX年11月25日生まれの健康な女兒(以降乳児A)とその母親。Aは第一子であり、母親と父親と三人で暮らしている。観察開始に先立ち、母親には、観察における同意書に署名してもらった。

2-2. 観察期間

20XX+1年6月～20XX+3年2月までの乳児Aが生後7か月(216日)～2歳3か月(816日)まで、

筆者が乳児A宅を訪問するかたちでおこなった。期間中、乳児Aの体調や機嫌などから、観察頻度は一定ではなかったものの、約30分の観察を合計36回(1080分間)おこなった。

2-3. 観察方法

母親には状況を特定せず、玩具等を用いて乳児と自由にやりとりをするように依頼し、母親の許可を得たうえでデジタルビデオカメラで録画した。

使用する玩具は、家庭における母子の自然観察場面ということを考え特に指定せず、その時の乳児Aと母親が親しんでいるものを用意してもらった。また、観察終了後に母親に乳児Aの言語面や生活面について、簡単に話をうかがった。

2-4. 分析方法

記録から、乳児Aの言語に関連する行動と主な母親の反応を抽出した。

〈乳児Aの言語に関連する行動〉

乳児Aの行動は、大きく、①「目さし」(母親の注意を喚起する視線)、②「指さし」、③「一語文」、④「二語文」の4つに分類した。

本論における、「指さし行動」とは、右手または左手の人差し指で対象を指し示す行為をいい、「一語文」とはひとつの単語で文の意味を表す語(「ママ」、「わんわん」)、「二語文」とは2つの語をつなげて話す語(「ブーブー、きた」など)とする。

〈母親の反応〉

母親の反応は、①「見る」: 乳児Aが行動をおこした対象に、無言で自分の視線をおくる、②「指さし」: 指さし行動で反応したもの、③「声かけ」: 対象について、「○○(対象の名前)があるね」、「○○がほしいの」など、声かけをおこなったものの総称、の3つの項目に分け、分類をおこなった。なお、声かけをしながら対象を見たものや、声かけをしながら対象を指さしたものは、③「声かけ」に分類した。「一語文期」において、乳児Aは指さし行動をおこなっているが、母親がそれに気づかない指さし行動がみられ(母親の注意を喚起しない)、「無反応」としている。

〈時期の分類〉

乳児Aの行動特徴に合わせて、「目さし」が多くみられた、20XX+1年6月28日～10月4日までを「目さし期」(7日間)、「指さし行動」がみられはじめた10月25日～12月21日を「指さし期」(9日間)、「一語文」が出はじめた20XX+2年1月31日～10月3日を「一語文期」(14日間)、「二語文」が出はじめた11月7日～20XX+3年2月17日までを「二語文期」(6日間)とした。

3. 結果

Table1は、乳児Aの行動と母親の反応について、

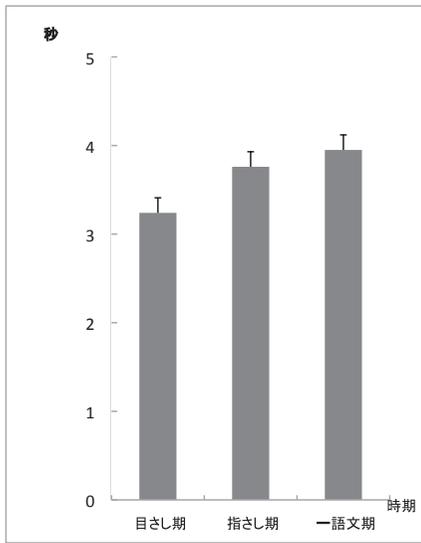


Figure 1 Mean latencies from eye-pointing to maternal verbal response (Error bar : SE)

なく指さし、一語文、二語文に対しても同様に検討した (Table2)。分類にあたっては、筆者が声かけの内容を紙面におこしたものについて、発達心理学の研究者2名に分類を依頼し照合した。その際、不一致だったものは話し合いをもって再検討し、一致させた。

「目さし期」、「指さし期」、「一語文期」での、「目さし」における名詞の割合に注目すると、どの時期でも大きな差はなく、一定している (目さし期: 51.1%、指さし期: 60.0%、一語文期: 57.1%)。また、「指さし期」における「目さし」と、「指さし」での割合は、ほぼ同一であることがわかった (60.0%、59.5%)。「一語文期」に入ると、「指さし」単独のものに対して、母親は声かけによる反応をしなくなる。しかし、「指さし+一語文」(64.0%)、「一語文」(65.2%)に対しては、半数以上の高い割合で名詞入りの声かけをしている。さらに「二語文期」に入ると、「目さし」、「指さし」への声かけはなくなり、「指さし+一語文」も 28.5% と、「一語文期」の半分以下になっている。その一方で、「一語文」(51.1%)、「指さし+二語文」(40.0%)、「二語文」(48.8%)は、ほぼ同一の割合で母親は名詞入りの声かけをしていることがわかった。

3-1-2. 母親の注意を喚起するまでの時間

Figure 1 は、乳児 A の視線が母親の声かけを引き起こすまでの平均時間を示したものである。縦軸は平均時間 (秒数)、横軸は時期を表している。「目さし期」、「指さし期」、「一語文期」の三期に分け (「二語文期」については該当なし)、分散分析をおこなったところ、時期の主効果は有意であり (F

(2,86)=5.10, $p < .01$)、Tukey による多重比較の結果、「目さし期」と「指さし期」、「一語文期」に有意差がみられ (それぞれ $p < .05$)、「指さし期」と「一語文期」の間には差がみられなかった。

3-2. 指さし行動について

3-2-1. 母親の指さし行動

3-1-1. で述べたように、乳児 A が指さし行動をする前の「目さし期」において、母親の指さし行動がみられた (4回目と6回目の観察)。これまで、母親の注意を喚起する子どもの行動、すなわち、子どもがイニシエータの行動のみを分析対象としてきたが、相互作用場面を観察していると、母親がイニシエータの母子のコミュニケーションが多く、特に母親の指さし行動が頻繁にみられた。母親の指さし行動 (イニシエータとレスポンドーとしての) について、Figure 2 に示した。縦軸は指さし回数、横軸は観察回を表している。

イニシエータのものを含むと、「目さし期」計7回の観察において、母親は合計14回の指さし行動をおこなっており、5回目以外全ての観察で指さし行動をしていることがわかった。3-1-1 で述べたように、「指さし期」の9~11回目の観察では、目さしが一旦みられなくなったが、この時期、母親は子どもの視線に指さしによる反応はしていないが、自身はイニシエータとしての指さし行動を頻繁にしている。Table1 から明らかのように、乳児 A は、「指さし期」、「一語文期」のどちらの時期も毎回指さし行動をしているが、イニシエータの指さし行動を含むと、母親も同時期に、同じようにすべての観察回で指さし行動をしている。「二語文期」になると、前の二時期 (「指さし期」、「一語文期」) に比べ、母親の指さし行動が半分以下に減っている。

3-2-2. 子どもの指さし行動

「指さし期」、「一語文期」、「二語文期」における、乳児 A の指さし行動について、宮津 (2010) の使用した、カテゴリー (Table3) ごとに分類した。

Table4 は、出現した回数と観察1日あたりでみられた平均頻度を表している。子どもがイニシエータの指さしをデータとしているため、他者の指さし行動を模倣する「g. 模倣」の指さし行動を含め、受け身による指さし行動は含まれていない。

全指さし行動の、1日あたりの平均頻度をみると、「一語文期」が10.1で最も多いことがわかり、「二語文期」になると、5分の1以下に減少する。また、カテゴリーの割合に注目すると、「指さし期」と「一語文期」では「f. 説明」が高いが (「指さし期」38.5%、「一語文期」46.0%)、「二語文期」では「c. 命名」が41.6%と高かった。また、「e. 質問」の指さしが、「指さし期」8.7%と「一語文期」9.2%であるのに対して、「二語

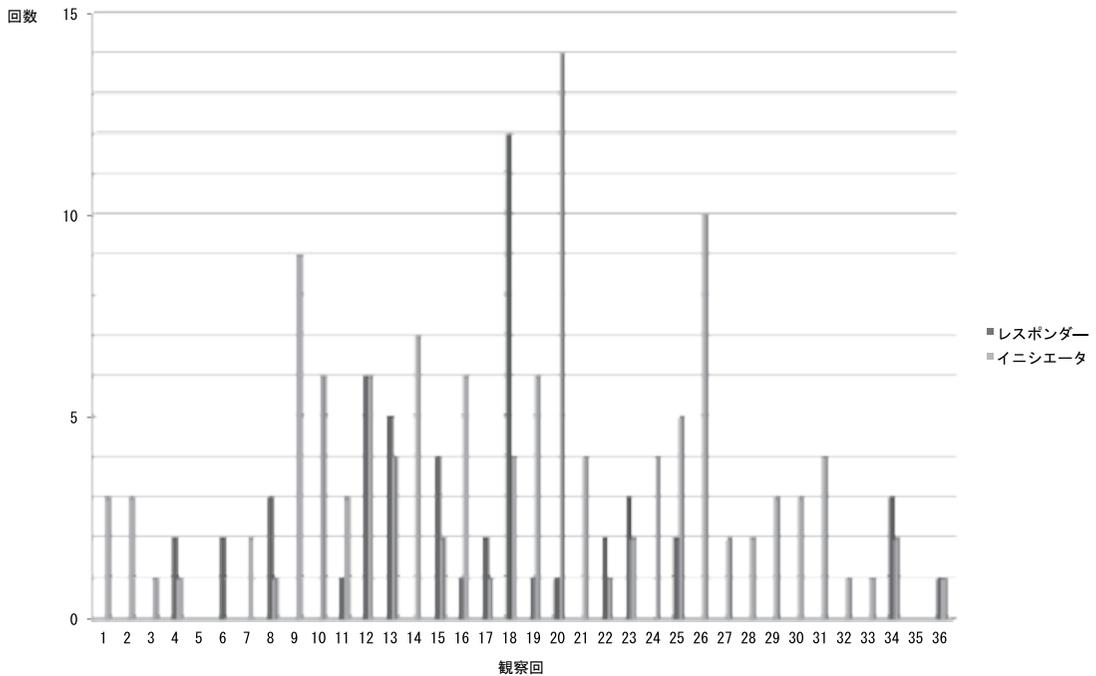


Figure 2 mother's pointing behavior

Table 3 The category and the example of pointing

	説明と例
a.注意喚起	自分の関心事象に他者の注意を向けようとする指さし(他者は対象に気づいていない) 例)無言で対象を指さし、相手の視線を対象へ向ける、「みて」、「あつ」と言いながら対象を指さす
b.場所・方向	物の在り処や、進行方向などを示すための指さし 例)ぬいぐるみがある方向を指さす、「あっち」、「こっち」と言いながら指さす
c.命名	指示対象を命名するのに用いる指さし 例)「わんわん」、「○○ちゃん」と言いながら指示対象を指さす
d.要求	自分の要求を他者に伝えるために、その対象を指さして示し、その実現をはかろうとする指さし 例)指示対象を無言で指さして他者に対象を取らせる、「あれ」、「ちょうだい」と言いながら対象を指さす
e.質問	指示対象について、相手へ質問するための指さし 例)無言で指示対象を指さし他者に指示対象の名称を言わせる、「これ、なに」と言いながら指示対象を指さす
f.説明	指示対象を説明するための指さし 例)動いているものを無言で指さす、「～があるよ」、「～してるよ」と言いながら指示対象を指さす
g.模倣	相手の働きかけを模倣して使用する指さし 例)相手が指さした対象と同じ対象を指さす、相手と同じことを言いながら同じ対象を指さす
h.その他	どの機能にも該当しない指さし

文期」では33.0%と増加することも特徴としてみられた。

4. 考察

4-1. 目さしの発達の意味

4-1-1. 乳児の視線に対する母親の反応

Table1 から「目さし期」では、どの観察回でも目さしがみられ、乳児期初期に母親が子どもの視線に敏感に反応していることがわかった。若葉

(1981,1982)は、乳児期初期において、子どもが物を凝視すると母親も同じものを凝視し、一方母親によって提示された物を乳児が凝視しない場合、母親はその対象を提示するのをやめるとの報告をし、これを visual-visual コミュニケーションの成立とよんだ。このように、もともと母親は乳児の視線に注目をしやすく、視線を手がかりとしてコミュニケーションをとろうとする傾向があることがわかる。「目さし期」における目さしの頻度の高さも、母

Table4 Frequencies of pointing behaviors per category and mean per day

	指さし期		一語文期		二語文期	
	回数	平均頻度/日	回数	平均頻度/日	回数	平均頻度/日
a.注意喚起	6(10.5%)	0.67	15(10.6%)	1.07	0(0.0%)	0
b.場所・方向	5(8.7%)	0.56	7(4.9%)	0.5	0(0.0%)	0
c.命名	8(14.0%)	0.89	18(12.7%)	1.29	5(41.6%)	0.83
d.要求	7(12.2%)	0.78	10(7.0%)	0.71	0(0.0%)	0
e.質問	5(8.7%)	0.56	13(9.2%)	0.93	4(33.3%)	0.67
f.説明	22(38.5%)	2.44	65(46.0%)	4.64	3(25.0%)	0.5
g.模倣	0(0.0%)	0	0(0.0%)	0	0(0.0%)	0
h.その他	4(7.0%)	0.44	13(9.2%)	0.93	0(0.0%)	0
全指さし回数	57	6.3	141	10.1	12	2
観察日数	9日間		14日間		6日間	

親のもつ乳児への注目しやすさからみられたことといえよう。また、麻生(1992)は、生後4,5か月から生後8か月頃までの特徴として、「もの」へ向けられた注視が活発となり、「母親の顔」へ向けられた注視が減少するとしている。このことから「目さし期」にあたる生後7か月頃は、子どもの視覚的な変化や動きが著しく、我が子の視線や見る対象の移り変わりに気づきやすいことが推測される。

また、「指さし期」の9～11回目の観察において、約2週間にわたり乳児Aの視線に母親が反応しなくなる時期があった。高い頻度でみられたにもかかわらず、急に目さしがなくなることについては、やはり乳児Aの指さし行動の出現が大きいのと考えられる。それまでの母親にとって、乳児Aとのコミュニケーションの方略は視線であり、乳児Aの視線の行き先によって興味の所在を把握しよう努めていた。しかしながら、乳児Aの指さし行動によりはつきりとその対象を指し示すようになると、彼女の内的状態をより的確に知ることができ「なにを見ているのか」ということよりも「なにを指しているのか」ということに対する、母親の関心の比重が大きくなったといえよう。しかし、この目さしがみられなかった3回(約2週間)の母子相互作用の様子をみると、「目さし期」同様、乳児Aはよく周囲の環境に視線を送っていることが窺われた。「目さし期」では、乳児Aの視線に対して即座に反応する母親の様子のみられたが、「指さし期」に入ると乳児Aがなにか対象をみた後、更にそれを指さすまで待

つ母親の姿があった。関心事に他者の関心を巻き込み、感動を共有することは、指さし機能の本質であり(山田・中西,1983)、それまで母親が主導であった母子間のコミュニケーションが、「指さし行動」によって乳児Aの主導へと変化したといえよう。また、その後12回目の観察において、再び目さしが見られたことは、乳児Aの身体面の発達が関係していると考えられる。一人座りから、つかまり立ちをはじめたことで、乳児Aの視界における刺激の広がりが増える。また、つかまり立ちをしている時の姿勢は、手が塞がっており指さし行動をすることが困難な時もあるだろう。よって、母親は再び乳児Aの視線に注目することでコミュニケーションをとるようになったのではないだろうか。

また、目さしの種類では「目さし期」、「指さし期」では「声かけ」が多い。しかし、「一語文期」では「見る」への割合も高く、「一語文+指さし」と「一語文」への母親の反応は、ほとんどが「声かけ」であることがわかる(Table1参照)。有意味語が出現すると、子どもの発する言語を補足したり、単語を繰り返すことに母親の関心が向き、「声かけ」が増えたと推測される。指さし行動や一語文に比べると、乳児Aの興味の所在を把握する手段として視線はやや弱い。よってこの時期、目さしが「声かけ」よりも「見る」への比重が高まったと考えられる。

「二語文期」になると一度しか目さしのみられず、主要な伝達方法は指さし行動、一語文、二語文である。乳児Aも2歳を過ぎ、急速な言語発達を遂げ、

母親との会話もスムーズになっていた。相互作用の様子も変化し、それまで母親がパペットや玩具を乳児 A に呈示しながら遊んでいたが、この時期になると乳児 A が一人言を言いながらまごごとをし、時折母親が相槌をいれるというような乳児 A が中心の遊びとなっており、一緒に遊ぶというよりも、遊びを見守るというような姿勢がみられた。また、母親側の視線の先をみると、乳児 A の表情や動作ではなく遊んでいる玩具に注目していることが多く、乳児 A と会話をしながら別の玩具を手にするなど、関わりの変化もみられた。おそらく、乳児 A の発達によって、常に注目し続ける必要がなくなったのであろう。そういった母親の余裕が、目さしの減少に繋がったと考えられる。

Table2で母親の声かけにおいて名詞が入っている割合をみると、「目さし期」では51.1%、「指さし期」の目さしは60.0%、指さし行動は59.5%であり、割合に大きな違いがないことがわかる。このことから、子どもが有意味語を発するまでの「指さし期」までを「前言語期」とすると、指さしに対する母親の声かけの内容と、目さしの声かけの内容は同一の可能性もあるといえる。従来、指さし行動の機能として、子どもが指さした対象について母親が言語的な意味づけをし、それが後の言語発達の基盤になるとされており、その声かけは指さした対象物の名称であることが多いことがわかっている (Masur,1982; Goldin Meadow et al.,2007)。本研究からは、視線に対しても、母親は対象の名称を含んだ声かけを指さし行動とほぼ同一の割合でおこなっており、指さし行動と同等、もしくは似通ったコミュニケーション機能が付随していることが示唆された。子どもが新しい単語を習得したり、対象についての知識を得るためには、情報を与えてくれる大人が注意を向けている対象は何か、環境の中の多くの刺激からひとつを特定し、その対象に対する注意を共有することが必要となる (矢藤,2007)。乳児期初期の「目さし期」において、乳児 A がこのような大人の役割について理解しているとは考え難いが、少なくとも子どもが視線を向けた対象について、母親は対象の名称を言っていることは事実であり、こうした経験が、例えば後の指さし行動や言語発達とのつながりなどの、足場作りの役割を担っている可能性も否めない。前言語期のコミュニケーションの中心は指さし行動に重きがおかれがちであるが、発達の基盤となりうる行動 (現象) が、乳児期初期からすではじまっており、子どもの発達を早い段階からみていくことが必要であろう。また、「一語文期」での目さしをみても名詞ありの声かけが57.1%と、「目さし期」、「指さし期」と、割合に大きな違いがみられず、

母親は質的に一定した内容の声かけをしていることがわかる。

4-1-2. 母親の注意を喚起するまでの時間について

乳児 A の視線が母親の声かけを引き起こすまでの平均時間を測定したところ、「目さし期」、「指さし期」、「一語文期」になるにつれ、視線への反応時間が長くなり、目さしが起こりにくくなっていくことがわかった (Figure 1 参照)。このことから、子どもの発達過程において、指さし行動、一語文、二語文といった、新たな行動が出現すると、それに対応するように、母親側も、注目する子どもの行動を変化させていく傾向がみられる。乳児期の母子相互作用場面の研究において常田 (2007) は乳児の姿勢運動能力の発達によって、母親のかかわりは変化し、こうした変化が新しい相互交渉のパターンの出現を導いているとしている。視線によるコミュニケーションから、言語を用いたコミュニケーションへと移行することで、母親もその状況に見合った関わり方を自然におこなっているのであろう。子どもの視線研究において、どのくらい一つの対象を見ているのかなどを測定した研究はこれまでもみられたが (山田,1978 など)、母親側に焦点をあて反応を引き起こすまでの時間の推移を検討したものはほとんどなく、今後視線だけではなく、指さしなどの他の行動における反応時間との比較も必要であろう。

4-2. 母子の指さし行動

4-2-1. 母親の指さし行動について

「目さし期」の、4回目と6回目の観察において、目さしの種類に指さしによる反応がみられたが、母親がイニシエータのものを含むと、この時期母親は乳児 A に対して頻繁に指さし行動をおこなっていることがわかった (Figure 2 参照)。指さし行動の発生のメカニズムに関しては、まだ共通した見解は得られていないが、岸本 (2012) は大人とのやりとりの中で大人から指さしをされ大人と一緒に同じ対象物を見るという経験を通して、大人が何らかの意図で自分に何かを見せようとする行動と気づくようになり、こうした気づきが指さしの産出を促すと考察している。また、ヒトは他個体に対して「教えたくて仕方ない」という認知傾向をもっていると指定する研究者もいる (Csibra&Geragely,2006)。指さし行動は、前言語期の子どもの伝達ツールとしてとらえられ、子どもに焦点があてられ研究されているが、例えばまだ言語的に未熟な子どもに対しよりわかりやすく伝えたい時に、大人側も指さし行動をひとつのツールとして使うなど、前言語期の子どもとかわる大人の指さし行動に焦点をあてると見えてくることがあると考える。指さし行動の発現には子ども自身の内的な発達はもちろんのこと、このよう

な外的要因の影響、つまりは本研究でみられたような母親の指さし行動の多さも考慮していく必要がある。

4-2-2. 子どもの指さし行動について

Table4から明らかのように「指さし期」、「一語文期」、「二語文期」における乳児Aの指さし行動について、観察1日あたりでみられた平均頻度をみると、「一語文期」が10.1で最も高かった。子どもが行う指さし行動について24か月頃になると、より明確に自分の意図を伝えたいため、指さしと言語を併用することがあり(秦野,1983)、こうした動機が頻度の高さにつながったといえる。また、カテゴリーの割合では、「指さし期」「一語文期」において、「f.説明」のカテゴリーが高かったが、保育現場をフィールドとした前言語期の子どもの指さし行動の様相についての研究(宮津,2010)においても、「f.説明」のカテゴリーが最も高かった。家庭場面で行った本研究でも同様の結果であったといえるが、保育現場では指さしの対象が他児など「他者」の様子を示したものが半数以上見られたことに対し、本研究の家庭場面では、玩具など「もの」に対して反応していることがほとんどであった。同じ「f.説明」の指さし行動であっても、その内容に違いがみられる。「二語文期」では、「c.命名」の指さし行動の割合が高かった。「c.命名」の指さし行動は、対象を指さしながら名称を言う機能があるため、「ものの名称を知っている」ことが前提となっている。菅井(2010)は母子の絵本場面の研究で、母親が「c.命名」の指さしを頻繁におこなっていることをあげており、そういった周囲の刺激や毎日生活をしている家庭での慣れなどが「c.命名」の指さし行動の割合の高さに関係していると推測される。また、本研究は子どもがインシエーターのものしか対象としていないため、今回は「g.模倣」の指さし行動は対象外であった。しかし、母子間のかかわりの中で「g.模倣」の指さし行動を互いに何度もし合う様子がみられた。自分の意図を伝える指さし行動の本来の意味とは異なるが、ひとつのコミュニケーションのかたちといえよう。今後、この「g.模倣」の指さし行動のような、レスポンスとしての指さし行動についても検討していきたい。

5. まとめ

本研究は、指さし行動が始まる9か月より前の時期において、母親の注意を喚起する子どもの視線に注目し、その発達の変化と意味についてみてきた。目さしは、子どもの発達と共になくなるのではなく、頻度は少なくなったり一時的にみられなくなることもあるが、言語獲得後も完全に消失することは

ないことがわかり、指さし行動も同様であった。特に乳児期は、短期間で心身の発達が目まぐるしく変化する時期といえる。そのため、次々にみられる新たな現象に目がいきがちであるが、乳児期初期から縦断的に観察をすることで、ひとつひとつが基盤となり、発達の節目に見合ったコミュニケーションへと変化していくことがわかった。人間の発達をみるうえで、一部分のみではなく全般的な流れを踏まえ前後の関係をみていくことは重要であろう。今回は、はいはいをしている生後7か月からの観察であったが、それより前の二項関係の時期でも、同じような目さしがみられるのか興味深い。また本研究のような目さしがおこるには、周囲の大人がいかにより子どもに注目しているかが肝心である。保育現場における観察でも、前言語期の子どもが対象や他者の様子をじっとみる様子は、度々観察されている(相良・村田,2009)が、保育士は本研究の母親のように、子どもの視線の方向について頻繁に言及したり注目したりする様子はあまりみられない。指さし行動は相手によって、その質に違いがみられることがある(宮津,2010)が、目さしが家庭場面での母子相互作用特有のものなのか、フィールドや人による違いについても検討していきたいと考える。

先に述べたように前言語期のコミュニケーションは、主に指さし行動が発現する9か月以降に関心が注がれている。しかし、岡本(1982)が言うように、「乳児は他者とつながりたい欲求をもってうまれてくる」。一見なにもしてないようにみえる乳児であっても、身体や表情などその時期に使える精一杯の方法で懸命にコミュニケーションをとっていることを本研究を通して改めて感じた。発達初期から詳細にみていくことで、更なる乳児のもつ能力が明らかになるのではと考える。

文献

- 麻生武(1992). 身振りからことばへー赤ちゃんに見る私たちの起源ー. 新曜社.
- Baillargon, R., Scott, R. M., & He, Z. (2010). Falsebelief understanding in infants. *Trends in Cognitive Sciences*, 14, 110-118.
- Bruner, J.S. (1995). From joint attention to the meeting of mind: An introduction. In C. Moore, & P.J. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origin and role in development* (pp.1-14). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 千秋紀子・大森慈子(2011). 自閉症における共同注意に関する検討. 仁愛大学紀要人間学部篇, 10, 49-59.

- Collis, G.M. (1997). *Visual co-orientation and maternal speech*. Schaffer:H.R. (Ed.) Studies in mother infant interaction. Academic Press.
- Csibra,G.&Gergely,G. (2006). Social learning and social cognition: The case for pedagogy. In Y. Munakata & M. H. Johnson (Eds.), *Processes of Change in Brain and Cognitive Development. Attention and Performance XXI* (pp.249-279). Oxford:Oxford University Press.
- Eilan,N.,Hoerl,C.,McCormack,T.,&Roessler ,J. (2005).*Jointattention:Communication and other minds*. Issues in philosophy and psychology. Oxford:Oxford University Press.
- 遠藤利彦(編) (2005). 読む目読まれる目. 東京大学出版.
- Goldin-Meadow, S., Goodrich, W., Sauer, E., & Iverson, J. (2007). Young children use their hands to tell their mothers what to say. *Development Science*, 10, 778-785.
- 秦野悦子 (1983). 指さし行動の発達の意義. 教育心理学研究, 31, 3, 70-79.
- 岸本健 (2012). 意図の理解と行動のコントロール. 林創・清水由紀(編著). 他者とかわる心の発達心理学, 金子書房, pp.4-20.
- Masur, F. F. (1982). Mother's responses to infant's object-related gestures: Influence on Lexical development, *Journal of Child Language*, 9, 23-30.
- 宮津寿美香 (2010). 保育現場における前言語期の子どもの「指さし行動」. *人間環境学研究*, 8, 2, 105-113.
- 瑞穂優・武藤安子 (1997). 前言語期の「乳児・もの・人」の三者関係の形成過程. *日本家政学会誌*, 48 (10), 865-874.
- 岡本夏木 (1982). 子どもとことば. 岩波新書.
- 相良順子・村田カズ (2009). 1歳児の視線の先と視線移動—保育園での観察をとおして—. *聖徳大学児童学研究紀要*, 11, 83-88.
- 菅井洋子・秋田喜代美・横山真貴子・野澤祥子 (2009). 乳幼児の絵本場面における母子の実物への指さしをめぐる研究, *読書科学*, 52, 3, 148-160.
- Tomasello, M. (1995). Joint attention as social cognition. In C. Moore, & P. J. Duham, (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development* (pp.103-130)
- Tomasello, M. (1999). *The cultural origins of human cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 常田美穂 (2007). 乳児期の共同注意の発達における母親の指示的行動の役割. *発達心理学研究*, 18, 2, 97-108.
- Wakaba, Y. (1981). *Development of pointing in the first two years*. Tokyo Gakugei Univ. The research institute for the education of exceptional children. Reports-Research.
- 若葉陽子 (1981). 指さし行動の発達に関する研究 3ヶ月—24ヶ月期の母子場面における観察. *教育心理学会第23回総会論文集*, 290-291.
- 若葉陽子 (1982). 乳児期における指さし行動の発達 基盤となる諸機能の発達との関連. *教育心理学会第24回総会論文集*, 270-271.
- 山田陽子 (1978). 言語発生を準備する一条件としての三項関係の成立 (1) 指さし Showing, Giving などの出現経過. *日本心理学会第42回大会論文集*, 840-841.
- 山田陽子・中西由里 (1983). 乳児の指さしの発達. *児童青年精神医学とその近接領域*, 24, 4, 239-259.
- 矢藤優子 (2007). 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における注意の共有と母親の発話: 7か月と12か月を比較して. *発達心理学研究*, 181, 55-66.

メッセージ

本研究は、母親の注意を喚起する「視線」に焦点をあて、言葉を話す前の乳児は、どのようにして他者とコミュニケーションをとっているのかを明らかにすることを目的としました。これまで、前言語期のコミュニケーション行動は、「指さし行動」などの「共同注意行動」が始まる9か月頃からに重きがおかれ、それが後の言語獲得など子どもの発達に重要であるとされていました。しかし、乳児期初期の子どもであっても「視線」というツールをつかって他者とかわかっており、母親もしっかりとそれに反応していることがわかりました。そこにはたしかに、ひとつのコミュニケーションのかたちが存在していました。乳幼児期の子どもの発達は凄まじく、私たちは「指さし行動」や「言葉」など、目に見えたり、明確に判断できる言動に目がいきがちです。しかし、生まれた時からヒトはその時期にできる精一杯の行動で他者とコミュニケーションをとっており、様々な相互作用によって発達していくのだと、研究を通して感じています。

2013.6.18受稿 2013.12.2受理

Eye-pointing of infant -infant's gazes which elicit mother's attention-

Sumika Miyatsu

Abstract

In this study, infant's gazes which elicit mother's attention are defined as "eye-pointing" and observed the development of child "eye-pointing" during preverbal period. Participants were one infant (girl) and her mother, and their were observed longitudinally at from 7 months to 2 years and three months old(36times).

The infant's communication behaviors related languages classified into Four categories("eye-pointings"(gazes which elicit mother's attention), "pointing behaviors ", " one-word sentences ", " two-word sentences"), and mother's responses were classified into three categories("lookings", "pointing behaviors", and "vocal behaviors"). The main findings were as follows: Especially most "eye-pointing" were responded by "vocal behaviors". The ratis of "vocalbehaviors "which contained the no words of objects in "eye-pointing"and"pointingbehavior" were almost the same(eye-pointing:60.0%,pointing behavior:59.5%). Therefore, "eye-pointing" and a "pointing behavior" may have the same fancement. And, the mean latencies "voice behaviors " from infant's gazes , had been becoming longer along the infant development. "Eye-pointing" were less with the infant's age . From these results, the infant shifted her communication mode from gaze to language, and, the mother change her communication mode related the infant development, too.

Key words: eye-pointing, pointing, preverbal vocal period, infant-morher interaction

Japanese Journal of Research and Practice on Child Rearing 4, 32-41. (2014)